

~~~~~  
研究ノート  
~~~~~

忘れえぬ舞台——『ヴェローナの二紳士』 雑感

狩 野 良 規*

忘れえぬ舞台というものがある。僕にもむろんいくつもあるが、考えてみれば、忘れえぬ理由はそれぞれ異なる。『ヴェローナの二紳士』（ロイヤル・シェイクスピア劇団 (RSC), 1991 年初演) は、「こんな粗雑な戯曲が面白い舞台になるはずがない」との思い込みを粉々にぶち壊してくれたという意味で忘れられない舞台である。

イタリアのヴェローナに親友同士の青年紳士 2 人。ヴァレンティンは広く世間を見て立身出世をと、ミラノへの留学を決心する。一方のプロテュースは、恋人ジュリアと離れられず、ヴェローナにとどまると言う。女なんかに、とヴァレンティンにからかわれる。だが、ヴァレンティンはミラノに着くと、大公の娘シルヴィアに一目ぼれし、さらに遅れてやって来たプロテュースも、故郷に置いてきた恋人を忘れて親友の思う相手にぞっこんほれ込んでしまう。そこから始まる二紳士の葛藤と背信と和解を綴った、シェイクスピア初期の青春喜劇。

いかにも三文芝居である。批評史・上演史をひもとくと、いつの時代も評判の悪い作品だったことがわかる。最も説得力に欠けるのは、プロテュースのあまりにも唐突な裏切り、そして終幕近くで突然この友を許すヴァレンティンの信じられない寛容さ。人物たちがチャライのか、作者がチャライのか。また、時や場所が混乱していたり、あいまいな記述が多かったり、登場人物の性格が首尾一貫していなかったりと、テキストにかなり問題がある。サミュエル・ジョ

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

ンソンは、駄作だからこそかえって沙^{シェイクスピア}翁の刻印が残っている、ノーマン・サ
ンダーズは、将来の喜劇の大成を約束したうえでの若き詩人の手つけ金のよう
な戯曲、と。でも、作品が出来ないと、批評家たちの言も下手くそな弁護論に
しか聞こえない。

さて、僕がオックスフォードに滞在していたころ、RSCのその年のストラッ
トフォード・シーズン、いちばんの目玉はデヴィッド・サッカー演出の『ヴェ
ローナの二紳士』だよ、これだけは見逃すな、というのがイギリス人の間での
もっばらの評判であった。ほんとうかいな？あの殴り書きの芝居が。

手元のノートには、1991年12月12日にスワン劇場にて観劇、とある。雪も
降らないのに霜と霧で一面銀世界の寒い日、列車が遅れ、途中のレミントン・
スパ駅からタクシーをとばして劇場へ駆け込んだ。

で、会場に入ったとたん、そこは別世界であった。僕のお気に入り、客席に
三方を囲まれた張り出し舞台のスワン劇場、奥舞台に7人の生バンドが入り、
桜の木の枝があしらわれている。左右にある格子戸は日本風か。ピアノが1台。
出演者たちが芝居の始まる前から交代で歌い、またダンスをしている。開幕直
前に僕が飛び込んだ時には、すっかり客席がなごみ、役者と観客の間の垣根は
すでに取り払われていた。

女性歌手が歌っているうちに、スッと二紳士が登場して、芝居がスタートす
る。ヴァレンティンは背が高く洋服もビシッと決めているが、バリー・リン
チ扮するプロテュースは小柄、髪も生え際がそろそろ危なそう。

ジュリアは可憐な娘、ヴァレンティンからの手紙を破り、でも一人になった
時にそれを読む姿がとってもいじらしい。一方のシルヴィアは成熟した大人っ
ぽい女性である。あまり出番の多い役ではないが、しかし登場すると、ちょっ
とした表情にゾクッとさせられる。演じるはサスキア・リーヴズ。1991年度の
RSCの看板女優、なるほど不倫や近親相姦を犯す役を十八番^{おはこ}にしている彼女な
ら、女がなんだと豪語していたヴァレンティンをコロッと行かせて説得力があ
る。

登場人物は、ヴァレンティンとプロテュース、シルヴィアとジュリア、さ

らには小姓スピードと召使ランスといった具合に、互いに対をなしている。初期の沙翁はそういう^{シンメトリカル}相称的な人物設定を好んだ。けれども舞台では、双方が好対照に見える方が面白い。

だから、ダンディなヴァレンタインに仕えるスピードもバリッとしたスーツを着込み、他方プロテュースの召使ランスは、黒い山高帽に冴えない上着を着た田舎者の爺さん。そして実は、この喜劇の一番の人気者は、ランスの連れている犬なのである。舞台に出てきたのは、どう見ても雑種犬、でもあくびをしたり、主人の言うことを聞かなかったり、よく馴らしてある。2幕3場でランスと犬が退場する時には、会場から大拍手。皆が心から楽しんだと満足を示す、これこそがほんものの拍手喝采！

が、犬にすっかり食われているように見えて、どうしてどうしてランスの独白に耳を傾ければ、実に味がある。観客の反応を十分に計算に入れ、それに応えて悠々と演技をしている。RSCはレパトリー・システム¹⁾で、役者は複数の芝居のいくつもの役を掛け持ちしなければならず、なかなか大変なのだが、ランスを演じたりチャード・ムーアはほとんどこの役だけのために呼んできた俳優らしい。

4幕4場、そろそろ間延びしてきたコメディにカンフル剤を打つべく、簡素な裸舞台に大理石の（むろん作り物だが）噴水が奈落からせり上がってきて、おっ、ちゃんと水も出るではないか。観客はもちろん大喜び。遊び心満点の舞台で、ランスの長ゼリフが始まる。なるほどリチャード・ムーアは特別扱いのようである。

わがシェイクスピア学の師匠に昔言われた、「沙翁は詩として読むか、演劇として研究するか。両方では焦点がぼやけるから、どちらかに決めなければいけない」と。戯曲か舞台か、文学か芝居か、テキストかパフォーマンスか。だが、欲張りな僕は後に映画まで論じることになる不肖の弟子で、しかし30代半ばの

1) 1本の芝居を連日上演するロングラン・システムに対して、レパトリー・システムは複数の芝居を交互に上演する。後者だと、舞台装置を日替わりで換えねばならず、また俳優の負担も半端ではないが、ストラットフォードだと一泊して2日で2本以上の芝居が見られるから、観客にとっては有難い。

英国滞在中に、かの国の役者たちが舞台上で朗じる詩の魅力に目を（耳を？）開かれた。

この芝居も、犬に美味しいところをかつさらわれて、なおセリフも聞かせるランスの妙味。単なる通俗的な面白さだけにあらず。だから、退場する際の称賛の拍手は、犬とランスと、両者に対するもの。上手な俳優あつてのシェイクスピアの詩行と実感させられた。

時代設定は1930年代に移してある。ヨーロッパが没落し、アメリカがのし上がってきた兩大戦間の時期である。ミラノ大公の宮殿は、さながらアメリカの金持ちの別荘といった風。籐の椅子とソファー、テニスのラケットなどの小道具も裕福なブルジョワ階級を想像させる。シンプルな舞台だと気の利いた小物を置くだけで、それが有効なシンボルとして機能する。

音楽は、生バンドがジョージ・ガーシュウィンやコール・ポーターなどのジャズ・ナンバーを演奏する。おゝ、アメリカ！ 転換の間に、1930年代の化粧をして黒いドレスを着た女性歌手が歌う。劇の進行中、彼女は奥舞台のピアノにひじをつき、背筋をピンと伸ばしてスラスト・ステージの芝居をじっと見ている。その格好がまた行かす。4幕2場では、プロテュースがピアノ奏者に曲をリクエストし、マイクを取って、歌手とデュエットする。それは聞けば、シェイクスピアの詩に曲をつけたもの。ステキ。

演出のデヴィッド・サッカーは、小劇場の芝居を得意とし、当時はヤング・ヴィク劇団を率いていた。テムズ川南岸のヤング・ヴィク劇場で見た、悲劇仕立ての『冬物語』もアーサー・ミラー作の『みんな我が子』も、ぴーんと張り詰めた緊張感がずっと続く、裸舞台の演劇のお手本のような公演だった。

そのサッカーが、へーえ、こんな愉快なコメディも作るんだ。サスキア・リーヴズ以外は、RSCでは二流どころの俳優ばかりのチームで。

^{おお}大化けしているのはジュリア役のクレア・ホールマンである。黒いドレスから小姓に変装すべく少年の服装になり、帽子で髪を隠すと、ガラリと変わる。思いを寄せるプロテュースに、彼の恋の使いをさせられた時の嘆きの独白（4幕4場）は、観客の同情を一身に集めて、人気絶頂のサスキア・リーヴズを食っ

てしまうくらい。このストラットフォード・シーズン、彼女はマイケル・マロニー²⁾を相手役に、『ロミオとジュリエット』のヒロインに抜擢された。さもありなん。

まだ“人生の垢”のついていない若者たちが繰り広げる、たわいなくもベタな恋物語である。ちょっとしたことですぐに気が変わる。単純な異に容易に引かかる。若気の至りの連発。^{やすやす}易々と間違いを犯し、軽々と人を許す。いいなあ、若い奴らは！

だが、後に憂い多き人生を抱擁する円熟した喜劇や、人間の心の深淵^{のぞ}を覗き込む暗黒悲劇を書く大文豪ウィリアム・シェイクスピアである。いくら習作期の戯曲とはいえ、この軽佻浮薄さはマズいよなあ。

人の感情の激変する様を、詩人は好んで劇化した。『から騒ぎ』、『トロイラスとクレシダ』、『オセロー』、『リア王』、『冬物語』……どれも人物たちの突然の心変わり、豹変ぶりを描いて、理屈を越えた説得力をもつ。しかし、『ヴェローナの二紳士』のテキストには、そうした可能性を開く豊かな含蓄はない。チャライ、軽い、薄っぺらい。それが良くも悪くも悪くも悪くも、「戯曲の本質」といえようか。

だから、研究者にはこの芝居は救えない。まだ作者に芸術的な力がそなわる以前の戯曲である。となると、台本に魔法の粉をかけられるのは、演出家と、そして役者しかない。

シリアスでどっしりとした悲劇には見終わった後いつまでも心に残る舞台があるが、軽やかな喜劇で脳裏に焼きついて離れない芝居は、デヴィッド・サッカーの『ヴェローナの二紳士』が初めてであった。辛辣な劇評で鳴らす『タイム・アウト』も「一夜「生きている喜び」を味わえる」と絶賛。三流の戯曲の本質を忠実に舞台化して、なお観客が心底からの幸福感に浸れる芝居に仕上がっている。

2) 1957年生まれ、史上最年少でRSCに入団、1991年度ストラットフォードでは主役級の男優だった。ケネス・ブラナーとは同世代のライバルであり、かつブラナーが監督した映画『世にも憂鬱なハムレットたち』（1995年）や『ハムレット』（1996年）では重用もされている。

四半世紀近くたって、いまだに忘れえぬ珠玉の舞台である。

(2013 年 9 月 脱稿)